

## 『The Ivory Tower 試 論』

——ヘンリー・ジェームズに於ける

最後の「ヨーロッパ」と「アメリカ」——

小 林 基

## 〔I〕

ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843—1916) のようなスケールの大きい作家と対決すれば、多種多様な推論と解釈の相異が生じるのは、至極当然なことである。一作家に関する批評の振幅の大きさは、作家の偉大さを証拠だてるひとつの尺度ですらある。しかし、ヘンリー・ジェームズの場合、その様相は、少し異なるように思われる。アイルランド系アメリカ人としてアメリカに生まれ、ヨーロッパのロマンチックな「異質性」に憧れ、イギリスで郷愁にとりつかれ、他面、ロンドンやパリに俗臭を感じ、イタリアの「絵のような美しさ」に惑溺し、結局、アメリカの国籍を離脱してイギリスの市民権を獲得し、霧深いパビロン（ロンドン）を最後の家郷するといった所謂コスモポリタンの図式の最後の局面をめぐるジェームズは、英、米両国の批評家から屢々まったく正反対の評価を受けてきたからである。そして、極端に国粋主義的な批評家のヒステリー的な発言を無視しても、たとえば、英国の良識派を代表するマイケル・スウオンが、『選択が行われた一旧世界が選ばれたのである。旧世界は、彼の選択を越えるもの、彼の必要であり、彼の生活であった——「そして、あの新世界は、それは私には無用」だったのである。』と、主張すると、他方、「アクセルの城」の名著で知られるアメリカの批評家、エドモンド・ウィルソンは、*The Ambiguity of Henry James* の中で、ジェームズにあって「アメリカ」と「ヨーロッパ」は、どちらが真実であるか？ と設問し、it is the ideals of the United States which triumph in James' work. Ibid. P. 137] と、最後の判定を「ア

メリカ」に下している。このような断定は、ポート・レイスの勝敗の判定めいて第三者には、いささか滑稽に思えるかも知れない。しかし、問題は、それ程単純ではない。われわれは、マイケル・スウオンが、ジェームズの快楽主義的な美的な要素とともに清教主義的な倫理的な要素をもかなり正当に認めているのを知るとき、ウィルソンとの懸隔は、それ程甚だしいものとは思えなくなるのである。事実、両者ともジェームズに於ける「ヨーロッパ」と「アメリカ」の問題を意識的な公正さをもって扱おうとしている。それにしても、ウィルソンの解釈は、明快である。いや、明快すぎるといえないこともない。アメリカの批評家には、この種のタイプの批評が多いように思われる。その好ましくない見本が、ヴァン・ワイク・ブルックスのジェームズ批評である。ブルックスは、*The Pilgrimage of Henry James* に於て、ヨーロッパを真に理解せず、終に祖国をもたなかった感わされたエクスペイトリエイトとしてのジェームズを描き、専ら中期の作品に好意を示して、彼の後期の作品を認めようとしなかった。

これは、「伝記」と「文学」の関係の混乱を示したものであり、エクスペイトリエイトとしてのジェームズに対する偏見が、作品評価の予断となっている典型であると云えないであろうか。同様に英国のジェームズ批評の中で、最も一般的で重要な位置を占める F. R. リーヴィスの研究は、イギリス小説の伝統の美質を迎えるジェームズを讚美し、同時代のアメリカのエトスの中にあるロマンチックな要素に反応するジェームズのもうひとつの面に対しては、余り同情的ではなかった。リーヴィスが、ジェームズは、イザベルと彼女の理想主義について無批判であるという意味の不满を

述べるとき、彼は、ジェイムズの態度にあるロマンチズムの性格を誤解しているように思われる。——‘We can’t even say that James makes an implicit critical comment on the background of American idealism that fostered her romantic confidence in life and in her ability to choose : he admires her so much and demands for her such admiration and homage, that he can’t be credited with ‘placing’ the conditions that as an admirable American girl, she represents.’ [The Great Tradition, P. 111] 更に、リーヴィスは *What Maisie Knew* や *The Awkward Age* を除いては、ジェイムズの後期の小説に対して冷淡な態度を執り、特に *The Ambassadors* を ‘bad one’ [Ibid. P. 126] と、こともなく斥けているが、このことは、リーヴィス自身の批評の限界を示しているように思われる。ともあれ、ジェイムズの作品を年代順に概観すれば、その絶えざる芸術的進化に注目せずにはおれないのであり、ジェイムズの著作活動を大別する三つの時期の一時期だけをみて、全体を論じることは、最も危険である。むしろ、われわれは、早急な結論を避けて、個々の作品についての多面的な研究により豊かな結実を期待できる。さもないと、ある単一の局面を初めから終りまで辿ることによって新たな洞察が可能であろう。先に挙げた要求を満たし、われわれの今後の研究の指針となるものは、恐らくジェラルド・ウイレンの編纂になる

*A Case-book on Henry James’s “The Turn of the Screw,”* 1959, のようなものであろうし、また、後に述べた意図に沿って一巻の書物として現われたのが、*The American Novels and Stories of Henry James,* 1947. edited and with introduction by F. O. Matthiessen である。この書物の意義は、それが、たといジェイムズに於ける「アメリカ」的特徴を誇張したものではあっても、T.S. エリオットが、グリアースンのアンソロジーを称揚したように「それ自体、一個の批評作品であり、また批評を喚起する」ものだからである。わたくしが、ここにとりあげたテキスト *The Ivory Tower,* 1914. と *Notes for The Ivory Tower,* 1914 は、この中に入っているも

のである。

## 〔II〕

ヘンリー・ジェイムズの貴重な小説 *The Ivory Tower* と *The Sense of the Past* は、断片として残されている。しかし、これらの小説は、ジェイムズの死によって未完成に終わった実に ‘last words’ であり、ひとりの偉大な芸術家の半世紀に亘る輝かしい創作活動の最後を飾るものとして決して恥かしくない芸術的品位を備えている。

*The Sense of the Past* も *The Ivory Tower* と同じくらい述べるべきことはあるが、ここでは、内容的にも技巧上からみても前者より遙かに優っていると考えられる *The Ivory Tower* についてのみ考察することにする。

「覚書」によれば、ジェイムズは、この小説を全十編で完成する予定であった。しかし、現在、われわれに残されているものは、残念ながら第四編、第二章の書き出しの数行までで、全体の約三分の一に過ぎない。しかし、作者の可成り詳細な見取図（覚書）を頼りにわれわれは、完成の暁の壮大な建築物を想像することは、充分可能である。

*The Ivory Tower* は、ジェイムズの後期の小説の延長線上にあり、ドラマの筋書きをもとにしている。例によってプロットの二重性が特徴的で、真実の行動と、それをカモフラージュする霧のようなヴェールがかかり、事実上、謎につつまれたミステリイのような微妙さをもって「製作」されている。後期の小説を優美に彩る意匠と技巧は、愈々洗練され、イミジャリイとシンボリズムの宝庫に一層接近している。そして、年とともに増し加わった複視的認識は、ここに於ても異彩を放っている。

そこでわれわれは、ジェイムズの見取図を手引にして *The Ivory Tower* とその登場人物を主として二つのレベルから眺めてみよう。

主要人物は、四人いる。グレイアム・フィールド（Graham Fielder）略称、グレイ（Gray）と、ホートン・ヴィント（Horton Vint）仇名は、ホーティ（Haughty）という二人の青年と、ロザンナ・ゴウ（Rosanna Gaw）とシシリア・フォイ（Cicilia Foy）略称、シスイ（Cissy）という二

人の娘である。他に、二人の老実業家、ロザンナの父、エイベル・ゴウ (Abel Gaw) とグレイの叔父、フランク・ベターマン (Frank Betterman) がいる。更に、アメリカの社交界を代表するデイヴィ・ブレイダーム (Davey Bradham) と彼の妻、オーガスタ (Augusta) 略称ガシー (Gussie) を見逃すことはできない。

ところで、本書は、*The Wings of the Dove*, 1902, のように「遺産の影響」を扱っている。登場人物と小説の背景は、主としてアメリカである。

ロザンナ・ゴウは、34 才になる独身娘で、人並外れて大柄で肥満型の女性。卒直で、気取りのない物静かな人柄であるが、一見、女性としての魅力に欠けている。彼女は、しかし、2000 万ドルの財産を有する父親の一人娘で、*'She knew how of old her inexplicable, her almost ridiculous type had disconcerted and disappointed him. (her father) [P. 871]* という父親に対する彼女の過去のインフエリオリティ・コンプレックスからみても、われわれは、彼女が *Washington Square*, 1881 の女主人公、キャサリン・スロウパー (Catherine Sloper) の生まれ変わりであることがわかるであろう。

もう一人の娘、シスイは、非常に美しく、社交上手の魅惑的な女性であるが、経済的には貧しい。彼女は、*Roderick Hudson*, 1876 のクリスティナ・ライト (Christina Light) や、*The Portrait of a Lady*, 1881 のマール夫人 (Mrs. Merle) のような機智と策謀にたけたジェイムズ独特の女性の系譜を想起させる。

二人の若者もまた余り金には恵まれていない。

フランク・ベターマンは、妻と二人の子供を相次いで失い、その後独身を通している。若者の一人、グレイアム・フィールダーは、ベターマンの唯一人の甥で、彼の片親姉妹とフィールダーという男との間にできた一人息子である。

ベターマンは、フィールダーとかつて事業のことで仲違いをし、互いに深く含むところがあったので、彼らの結婚を機に交際を絶っている。

フィールダーは、結婚後まもなく若妻とグレイを残して死ぬ。彼女は、グレイを連れてヨーロッパへ渡り、そこで貧しいが誠実なイギリス人と熱

烈な恋に陥り、婚約する。

ベターマンは、彼女の新しい婚約者、ノースオーヴァ (Northover) に一度も会ったことがないのに、この組み合わせに対して気むずかしい反感を示す。しかし、ジェイムズは、ベターマンの少年時代の不幸な肉身関係をも同時に暗示している。ベターマンは、自分と同じようにグレイが、継子の苦しみを味うであろうと同情する。そこで、彼は、彼の片親姉妹に宛て、婚約解消を迫り、もし、彼女が、身分の低い外国人との結婚を断念して息子を連れてアメリカへ戻ってくるなら、彼女を赦して、できるだけ面倒は見るという意味の手紙を書き送る。彼女は、今迄彼の世話になったことはないのに、そのような要求は、過度な要求であるとしてきっぱり断る。彼女の返事に対して、ベターマンは、再度手紙を書き、「お好きなように勝手に結婚なさい。だが、少年を自分の許に寄越せば、あなたからも当然感謝を受けるように育てるつもりである。」と云う。

ベターマンの手紙は、彼女をジレンマに陥らせ、思い余った彼女は、僅か 14 才の息子に相談して解決を求める。

この間、ベターマンは、アメリカで、ロザンナの父、エイベル・ゴウと共同で事業に専念している。ゴウ夫人とロザンナは、教養を磨くためにヨーロッパに行く。ゴウとベターマンの協同関係は、やがて二人の利害の不一致から断交状態にいたるが、ヨーロッパでは、ゴウ夫人とロザンナは、フィールダー夫人、ノースオーヴァ氏、そしてグレイの三人とすっかり意気投合して、互いにヒューマンな関係をもつようになる。二つの状況は、対照的である。

グレイより 2 才年長のロザンナ (ジェイムズは、時間の経過を自然にするため当然のことながら年齢を極めて慎重に計る。) は、少年の肩にかかっている重い問題に進んで手を貸し、助言を与える。彼女は、ノースオーヴァ氏に好感をもち、他方、ベターマンを嫌っている。ベターマンが、何か不正な遣り口で自分の父親を食い物にしていると思込んでいるからである。ヨーロッパで優美な生活をたのしんでいる彼女は、グレイに対して、文化的な教育の機会と、ベターマンが授けようとしている「略奪の遊戯」を比較して暗示す

る。ロザンナは、自分が 그레이 の運命に決定的な影響を与え、 그레이 の問題を解決したと信じ込み、その後、 그레이 に対する一種の負い目を感じるようになる。しかし、このことは、ロザンナの一人相撲かも知れない。作者は、 그레이 の決断を 그레이 をして語らせないで、飽くまでロザンナの意識を通して間接的に語る。ともかく、結果は、 그레이 が、ヨーロッパにとどまることになる。

フィールダー夫人とノースオーヴァ氏は、結婚し、10年後に彼女が死ぬまで 그레이 を中心に三人は、つつましく幸福な生活を送る。ノースオーヴァ氏と 그레이 は、その後ずっと仲の好い親子の関係を保つ。それは、この少年をヨーロッパに引き留めて置くためのジェイムズの工夫である。

本書は、 그레이 の継父、ノースオーヴァ氏の死の直後、ベターマンが最後の病に罹り、 그레이 を呼び戻そうとしているところから初まる。

그레이 は、この時まで L. エーデルが指摘しているような、父母、姉弟のいない理想的状態で叔父の前に姿を現わす。——sometimes his hero is an only son, usually with a widowed mother. He thus confers on them an ideal fatherless and brotherless state. [Leon Edel : *Henry James. The Untried Years*, P. 60] その上、ヨーロッパの文化的雰囲気身を身につけているとなれば、まったくジェイムズ好みの主人公として打って付けである。

그레이 が、ニューポートのベターマンのところに現われるとき、彼は、32才になっており、20年近くの歳月が、先述の挿話との間に流れている。そして、先述の挿話は、過去の基本的な出来事として、各人物によって回想風に綴られている。

さて、ベターマンに対するロザンナの辛辣な反感は、年月の経過とともに緩和され、同時に、彼女自身の両親のすさまじい経歴についても遙かによく認識するようになっていく。ロザンナの成熟した目で見れば、ベターマンと父親の醜い争いは、一方にだけ責任を負わせられるような性質のものではないことがわかる。彼女は、また前にふれたように、 그레이 から莫大な物質的取得の機会を奪ったことを心苦しく思っている。 그레이 も、彼の継父も物質的には余り恵まれていなかったからである。そこで、ロザンナは、ノースオーヴァ

氏の訃報に接したとき、甥の消息を知りたがっているベターマンを訪ねて、この老人の心に働きかける。徐徐にロザンナは、金銭の世界で硬化しているベターマンをその忌まわしい状態から覚醒させ、 그레이 に対して、‘some decent thing’ [P. 878] をするようにうったえる。 그레이 が、かつて一度もベターマンに無心したことはなく、貧欲な物質的期待を抱かなかった唯一人の身内のものであることをベターマンに思い起させる。ロザンナの意識的な動機は、 그레이 に支払わせた犠牲の代価を償うことであった。——‘To make up to a person for a wrong I once did him.’ [Book I. Chap. I. P. 875] そして、ベターマンが、 그레이 を迎え、 그레이 が、それに応じてやってきたのは、彼女の訴えの結果である。しかし、 그레이 は、「自分が来ないことによって起り得る ‘ugliness’ を避けるために戻って来た」のであるという微妙な主体性をも留保している。

그레이 は、実務の経験が全然なく、また経済的関心も持ち合わせていない ‘cultural education’ を第一義的に考えるような人間である。感受性が強く、審美的、倫理的傾向を有し、美術に造詣が深く、多くの言語に精通している。ジェイムズの所謂、ヨーロッパ的文化伝統を父とし、アメリカ的理想主義を母とする嫡出子である。彼は、実利的な俗世間を相手とすることは、苦手である。——You see ‘people’ are exactly my difficulty—I’m so mortally afraid of them. [Book III. Chap IV. P. 961]

그레이 は、たしかに物質的欲求は、少く、金の出入りに関心を示さない。彼は、金銭によっては得られないもっと洗練されたなにかを経験することに関心をもっている。

ロザンナのベターマンに対する巧妙な働きかけ、また、ベターマン自身の内的な変化によって、ベターマンと 그레이 の劇的な出会いの機は熟している。 그레이 と顔を合わせた瞬間、ベターマンは、この青年が、今迄彼の周囲を取巻いていたがさつな人間のつくる汚濁した雰囲気——この空気に彼は、最近窒息しそうになっていた——とは違った雰囲気を漂わせているのを感じて、よろこぶ。——‘Well, there’s all of you I’m going to want. And there must be more of you than I

see. Because you are different.' [Book. II. Chap. P. 916]

金銭の刻印は、ベターマンと関係を有する凡ての人の思想や行動に歴然とあらわれている。—— 'The enormous preponderance of money. Money is their life.' [P. 919] この甥だけが、人を押しのけて我武者らに前進しようと欲しない変り者である。—— "You utterly loathes and abhor the hustle! That's what I blissfully want of you." [Book II Chap. II P. 920]

三セントに値するビジネスにも携わったことのない男、それ故に自らを、'blatant ass' [P. 920] と告白する 그레이に、徹頭徹尾実業の鬼であると自負する ベターマン —— 'I was business, I've been business and nothing else in the world. I'm business at this moment still—because I can't be anything else.' [Book II Chap II. P. 920] が、生涯の蓄財を全部残してやろうと決意することは、決して心理的に矛盾しない。

그레이に残されたベターマンの遺産は、数10万ドルである。当時のニューヨークの経済界の尺度からすれば、それ程莫大な金額ではないが、그레이の経験と必要から計れば、驚くべき大金である。

그레이の友人、ホートン・ヴィントは、実利の世界の空気をいとも気楽に呼吸している。だが、いまだ自分で事業を起すに足る程の金を集めるには到らない。ここに、그레이とホートンの微妙な結びつきが、作者によって呈示される。二人の友情的な関係をごく自然に展開しようとして、ジェイムズは、先ずロマンチックなひとつのエピソードを用意する。

ずっと以前、 그레이が少年の頃、スイスのアルプス山中で道に迷い、足を踏みはずして、岩たなにぶら下っているところを、ホートンが、生命の危険を冒して 그레이を救い出したというのである。すくなくとも、 그레이は、そう信じている。ところが、ホートンにとっては、その出来事の思出は、決して楽しいものではない。—— 'I remember, though I can't for the life of me imagine how you contrived, that the tables were quite turned and I shouldn't in the least have got out of my fix without you.' [Book III. Chap. V. PP. 975—6]

この事件の真相は、わからない。現実にはホートンの言うように、 그레이のロマンチックな性格が創作したフィクションであるかも知れない。しかし、ロマンスは、 그레이がホートンの 'gallant' な行為を信じることによって成立する。

그레이は、その時からずっとホートンに対して心理的な負債を感じている。そこで、彼は、実務に明るい恩人に自分の財産の管理と運営を依頼し、正当な運用の利益に対して1パーセントのプレミアムを提案する。ホートンは、それを許諾する。

ホートンは、シンシア・フオイと親しい関係にある。シスイは、既に述べたように、美しく、活発で、機転のきく伶俐な女性である。彼らの関係は、典型的に近代的で、ロザンナと 그레이の関係と対立的に描かれる。ホートンとシスイは、まだ婚約はしていない。二人とも貧しく、結婚に踏み切るには、打算的であり過ぎるからである。彼らの生活態度は、相似している。二人とも、金がないから結婚できないことを卒直に認めている。ホートンは、そのうちに金持になれることを確信しているが、シスイには、ホートンが、金儲けに専心しており、しかも相当の才覚がありながら、現実には、裏目裏目と出ているのが気に掛かる。彼女は、しばらく彼の形勢を静観しようとする。

ホートンは、強引で無慈悲なゴウやベターマンによって代表されるニューヨークの実業家のタイプのように描かれていない。ホートンが、自分と 그레이の性格の相異について、シスイに語っている行は、興味深い性格研究となっている。—— 'I remember he used really to exasperate me almost by seeming not to have wants, unless indeed it was by having only those that could be satisfied over there as a kind of matter of course and that were those I didn't myself have—in any degree at least that could make up for the non-satisfaction of my others. I suppose it amounted really,' said Horton, "to the fact that, being each without anything to speak of in our pockets, or then any prospect of anything, he accepted that because he happened to like most the pleasures that were not expensive. I on my side raged at my inability

to meet or to cultivate expense which seemed to me good and happy, quite the thing most worth while, in itself : as for that matter it still seems. [Book III. Chap. I. P. 943]

ホートンには、また最初、どっしりとした肉体的質量感とともに実利的な価値もあるロザンナを攻略しようとして失敗しているという実績がある。

ロザンナは、彼女の財産を目当てに異性から接近されるという恐怖によって心を武装し、ホートンの求婚を断わったのである。肉体的に魅力のない富裕な娘は、男性の愛情を信じることはできない。この不信と恐怖の身構えが、彼女の性格と境遇の基調となっている。彼女は、父親の死とともに2,000万ドル程の遺産を相続したが、父親の意志に反して、彼女は、ドルを憎悪しているかのようである。

シスイも、 그레이に対してある種の興味を強くもっている。彼女は、 그레이の趣味を理解し、彼の内面に入っていくことができる繊細な感受性をもっている。 그레이と審美的に、知的に疎通できる点では、シスイは、ロザンナに優っている。

그레이は、金が目的でシスイが彼に接近してくるのだということがわからない。彼は、ロザンナのように慎重過ぎる態度で、人々との交渉にしり込みするようになることは、恐ろしいことだと思っている。ロザンナのように境遇によって影響を受けるのを認めることを恐れている。ロザンナは、 그레이にとって避けるべき忌まわしい見本である。 그레이は、ロザンナを評して次のように云っている。——‘She loathes self-exhibition ; she loathes being noticed ; she loathes every form of publicity.’ [Boop. III. Chap. IV. p. 965]

ところが、 그레이自身の目的は、‘To develop my capacity’ [p. 963] であり、ヨーロッパで経験できなかった‘a big experience’を経験することであるから、人々と、自由に積極的に交わりを結ぶ。ロザンナは、しかし、 그레이の状況も彼女の場合と相似していることを仄めかそうとはしない。ロザンナは、自分の感情は、特殊で、自分にとってだけ正当で、不可避的なものであると考えているからである。

実務的な頭脳をもち、金に心を傾けている人々

のサークルの中に入って、 그레이は、彼らの理解力や想像力が自分に欠けているのは、何か、驚くべきことであり、自分が生れつき彼らと同じ様に現実的な能力を持ち合わせていないことは、救いがたい恥辱であると考えられるようになる。 그레이は、未知の世界に対して畏怖の念を抱いているので、その中に向こう見ずに突入することを控えている。しかし嫌悪を感じているわけではない。新しい財産を管理している友人の財政的な手腕を信頼し切っているのである。彼は、ホートンの財産運用に余計な干渉をしないで任せている。あらゆる金銭上の問題や、その決定は、ホートンに委ね、 그레이は、ホートンの提出する書類にサインを与えるだけである。こうして、ベターマンの遺産の相続者は、実務の煩雑から完全に開放され、静かに世間を観察し、彼独自の美の世界を拡大していく。

ホートンは、 그레이の財産を思いのままに回転して、雪だるま式に大きくしていく。

ホートンの経済状態が改善されつつあることは、シスイにとってもまた、快いことである。ひよっとすると、ホートンと一緒になくても金持になれるかも知れないという計算が心に浮ぶ。ホートンとシスイの関係は、彼らの世間に対する‘ambitious’態度によって結ばれている。

그레이もまた、ホートンよりはずっと純粋にこの‘exceptionally clever’ [p. 1007] な女性に引き付けられ初めている。ジェイムズの注釈を俟つまでもなく、シスイの行動の役割りは、機械の車輪である。ここに、 그레이とホートンとシスイの三つ巴のドラマが展開する。

그레이は、ホートンに、本当にシスイと婚約しているのかと問い質し、また「誰かが、彼女に求愛するとしたら、きみにとって苦痛で侮辱的で、争いの種とか挑戦とか、そういう意味のことになるのか？」と、正面切って訊ねる。ホートンは、 그레이の問いに強い否定的な返事をする。 그레이は、その答を信じようとする。ホートンは、明らかに彼の友人の期待するような答を用意したのであるが、 그레이は、その瞬間、彼自身の行動の自由のために、ホートンの言葉をそのまま受け入れる。

ところが、 그레이は、後日、ホートンが、シス

イト、ある特別な関係を表わすような状態で一緒にいるところにぶつかる。この事実は、ひとつの大きな問題を永解する。つまり、シスイとホートンの愛情関係は、もとよりのこと、ホートンの友人に対する「誠実さ」の性格を啓示する。ホートンは、今や、彼の事業が、シスイとの結婚を考慮してもよい程好調であると判断し、自己の貧窮状態を打開するためにロザンナの資力を当てにする必要はもうないから、ロザンナ以外の女性と結婚してもよいと考え初めているのである。

グレイは、シスイが、一方は、既に金持、他方は、急速に金持になりつつある二人の男を天秤にかけ、選択の自由を保留していることを悟る。彼は、ホートンの金儲けの才能が、シスイの心に効果的に働いていることを認める。このことは、また、シスイの欲求と理想の限界をも表わしている。

金の威力は、アメリカの社会を覆っている灰色の霧である。グレイの周囲にいる金持たちは、彼らの資力を実に俗悪に費消している。それは、本書の冒頭に於て紹介されるニューポートの「無感覚な装飾物で飾りたてられた」(smothered in senseless architectural ornament [p. 867] 豪華な別荘に象徴されている。ジェイムズは、文化史に対するひとつの指標として、建築物に関して特に敏感であった。現代作家の中でも建築構造に関して造詣の深いイヴリン・ウォーが、クロミウムと硝子造りの当世風な建築物によって俗悪な「現代」を象徴していることを思い合わせると興味深いものがある。

ともあれ、グレイは、自分の周囲にいる多くの墮落した人々が、如何に勝誇って生活しているかを知るようになる。換言すれば、ジェイムズが、本書で暴露しようと意図した感覚 'the black and merciless things that are behind the great possessions' に到達することになる。

ホートン・ヴァイントは、グレイの面倒を殆ど完全にみているという自己の論理に決して怯まない。だが、グレイは、ホートンから受け、またホートンに与えているものとは、まったく異質的なものに没入している。グレイは、金銭を生活の最高位に置くアメリカ的価値評価の純粋な否定者である。

アメリカの上流社交界に名高いブレイダーム夫妻とグレイは近附きになる。ブレイダーム家の財産は、全部、妻、ガシーのものであるが、彼女の濫費によって、身代の基礎は、揺らいでいる。無論、体面を繕って表向きは、立派に見せているが、台所は火の車である。デイヴィは、グレイに相当の大金の信用貸しを依頼する。グレイは、「ちよっと誰べてみましょう。」と返事をするが、これは、つまり、金銭の使途を告げないで、ホートンから引き出せるかどうか当てみようということである。これまでは、グレイは、ホートンから自由に金を引き出していたのに、デイヴィから無心された金額は、ホートンを承知させない。デイヴィは、彼の要求額を三分の一程に削って、ホートンは、それより大きくてはグレイに渡さないだろうと言い、財務管理人が、彼の友人である使用者を追放しなければならない数字を挙げて、ヒューモラスな当てこすりを言う。グレイは、デイヴィ同様、ホートンの弁解理由が、か細いことを認めながらも、なお、彼を弁護する。

このことの後、程なく、ホートンは、グレイの許に来て、グレイの財産の破滅的な損失と、より小規模ではあるが彼自身の財産の損失を告げる。ホートンは、勿論、それが、自分の不正行為によるものではなく、他人に一杯喰わされた結果であると訴えることをも忘れない。

事実は、ホートンが、グレイの金を横領する最後の勝負にでて成功したのかも知れない。そうしてこういう推量は、勘定高いシスイが、ホートンに前よりも一層親しく接近しているという状況によっても補強される。

グレイは、敢て何も訊ねず、何も調べないで、金銭に対する彼独自の無関心の論理を押し通す。金の損失は、友人のことをあれこれ調べたり、友人を非難したり、まして裁判沙汰にする程重要な問題ではないと考える。彼は、それよりも、ヨーロッパへ帰り、以前暮したような静穏な生活を送りたいと思う。彼は、ベターマンから譲り受けた金の「歴史」について知り、また、金に執着したエイベル・ゴウの生涯が、いかに空しいものであったかを現実に見ている。グレイは、長い間、ベターマンの詐取の結実を享受しているという考えに煩わされてきた。いや、ベターマンの金の「歴

史」は、最後の段階にきて、明らかにされるのかも知れない。この点は、不分明である。

ともあれ、グレイは、非行に滲みついている人々の群や、拝金主義の毒気に冒されているアメリカの生活様式から静かに身を引いて、ヨーロッパの美的生活に戻っていく。

グレイは、ジェームズの「精神家族」の一員であり、‘innocent’の系譜の最後の者である。そして、グレアム・グリーンが、ジェームズの支配的情念を、ユダ・コンプレックスであると指摘しているように、本書に於ても、この「裏切り」の劇が、クライマックスになっており、*The Wings of the Dove* や *The Golden Bowl* のテーマと符節を合わせている。

以上は、グレイアム・フィールダーを中心とする *The Ivory Tower* のひとつの局面である。

### 〔Ⅲ〕

この小説には、ひとつの難点がある。それは、ジェームズ自ら覚え書の中で認めているように、主人公、グレイアム・フィールダーの ‘excess of culture’ [p. 1026] ということである。そこから、「グレイアム・フィールダーのような徹底した非生産者に余り有効な未来を期待することはできない。」という F. O. マスーイーセンのような意見も出てくる。このような批評を敷衍してこの小説を解釈しなおせば次のようになるだろう。

グレイは、一定の職業をもたないし、仕事に就いたこともない。給料支払名簿にお目にかかったこともないし、ビジネスの繁雑さも知らない。彼は、生産的などのような種類の仕事にも携わらない。世間の人々が通常考慮しなければならない家庭や社会の問題に煩わされたことがない。しかし、彼は、鋭敏な感受性をもち、また、すばらしい文化的な素養がある。彼の関心は、もっぱら教養に向けられている。従って、彼は、これまで空虚な意識をもったことはないし、生を浪費したとも思わない。彼は、ひそかに将来の著作の機会を待っているのかも知れない。彼には、想像力がある。繊細な神経とすぐれた思考力もある。しかし、今迄のところ、彼は、芸術を天職とする人ではない。いわば、芸術のデイレタントである。

この小説の冒頭で、彼の母親と、継父が死ぬ

と、彼は、ヨーロッパの生活にピリオドを打つ。既にヨーロッパの教育の恩恵を相当程度得ていたもので、ヨーロッパの舞台は、彼にとって狭いように思われる。そこで、更に大きな生活の転回を計る必要があるだろう。こうして、アメリカは、グレイの進歩の第二前提となる。グレイは、ここで人生をより完全な姿で把える機会が与えられる。

ベターマンが、グレイに彼の財産を遺すことを決意したのは、この青年が、「ヨーロッパ」からやって来たためであり、彼の存在そのものが、「アメリカ」の文化的貧血症に新鮮で健康的な輸血となるだろうと信じたからである。ベターマンの態度は、ロマンチックで理想主義的でもある。ベターマンは、過去の実利的な世界から脱して変貌している。

Betterman : It's not for myself, it's not for myself—I mean your being as I say. What do I matter now except to have recognized it?

No, Graham—it's in another connection.

It's for the world.

Gray : The world?

Betterman : Well, our great public.

Gray : Oh your great public!

Betterman : That's the way I like you to sound.

It's the way she told me you would—I mean that would be natural to you. And it's precisely why—being the awful great public it is—we require the difference that you'll make.

So you see you're for our people.

Gray : I shall make a difference for our people—?

Betterman : Don't think you know them yet, or that it's like over here at all. You may think so and feel you're prepared. But you don't know till you've had the whole thing up against you. [Book II. Chap. II. p. 919]

金儲けのために活用するのではない美しい才能がある。また、経済的に直接利益とならない人間的な価値も存在する。そして、グレイは、かかる優美な花々の開花を妨げる要素のある「アメリカ

カ」的な土壌に新しい養分を与える可能性をもっている。彼が、物質万能の野卑と残酷な病気に感染しないような体質に恵まれているだけに、文化を追求する過度な欲求を抑制して、彼の可能性をより有益に現実の社会に適應させることができたはずである。ところが、実際には、グレイは、「アメリカ」の周辺をぼんやり歩き廻り、友人のホートンに生活の責任を押しつけて、自分の周囲で悪事がなされるような状況をつくりだし、自らは、離れた高所から静かに傍観している。過ちを犯す危険のない彼独自の理想に固執している。

探求し得ない不可解な神秘の深みから、グレイは、ある勝利に似た感情を引き出すことに成功するが、それは、勝利の実体ではない。彼が最後にヨーロッパに逃れていくのは、不毛な生存への逆戻りではなからうか？

グレイは、結局、唯一人象牙の塔に閉じ籠り、この世界のできごととは関係なく生きていくであろう。

墮落し切った人間が、グレイを喰いものにすることは、この小説の主要な構成要素ではなく、より次元の低い副次的なプロットである。ジェームズは、ありふれた強奪によって得られるような貧しい陳腐な興味にまさって、道徳的な結末を与える真の状況をつくり出している。つまり、グレイを破廉恥に失敗させ、彼を狡猾に裏切るものは、グレイ自身である。即ち、更に大きな成長の機会を却ける彼の利己的な恐るべき力である。

以上のようにみてくれば、この小説は、ひとりの意味深い寓話である。そして、これも、この小説の別の局面とみられないことはない。しかし、ジェームズが、真に表現しようとしたものは、そのような警告や教訓の付け加えられた単純な劇とは異なる陰翳に富んだ複雑な構成をもった劇である。そこには、「complexity」の中に不思議な「lucidness」があり、「lucidness」とともに微妙な「complexity」がある。それは、また、内容と形式の渾然たる統一、詩的な調和美をもっている。

ジェームズの「シナリオ」を参考して、この「ドラマ」の構成をもう少し仔細に調べてみよう。もっとも、この「シナリオ」も、肝心なところは、ぼかしてある。「時間」と「場所」の関係も部分的には不明瞭である。それは、場面をニュ

ーポートからニューヨーク、そしてレノックスと移動させることによって、1年を、15・6月に活用するという工夫を用いているからである。たとえば、第一幕から第三幕までの背景であるニューポートの8月は、初夏であり、第九幕、第十幕のレノックスは、11月の下旬が、インディアン・サマーであるといった工合である。ニューヨークが、背景に使われるのは、冬季に限定される。

次に、この「劇」は、既にみてきたように *The Awkward Age*, 1899. に於ける「flexibility」と「variety」の技法が適用されている。つまり、人物を交互に出して、「act」と「aspect」をコントロールする。各人物の印象は、次々に補足され、修正されていく。

第一幕、『ロザンナ』8月初旬、ニューポート。

第一場——エイベル・ゴウの「small sharp shrunken profile」が紹介される。ロザンナのベターマンに対する働きかけを暗示する。グレイ・ム・フイールダーのニューヨーク到着を、家政婦が知らせるが、彼は、まだ姿を見せない。彼は、第二幕になって初めて登場する。

第二場、「ロザンナとディヴィの会話」——

ディヴィの晴ればれとしたつやのある顔、フランスの学生のように短く刈り込んだ黒い頭髪、丸く濃い活動的な眉といった容貌と、彼のヒューモラスな態度が観察される。

彼の妻、ガシーは、ディヴィの評によると、—always wants her for something—she wants everyone for something so much more than something for everyone— and there are none of us that are not worked hard, even though we mayn't bloom on it like Cissy who, by the way, is looking a perfect vision.' [p. 877] しかし、ロザンナの目には、ガシーは、「hovered like a bustling goddess in the enveloping cloud of her court.' [p. 877] である。

グレイの到着を、人々は、興味深く待ち構えている。ディヴィは、面白そうに云う、—'There's no limit to what we want to know.' [p. 877] ディヴィは、アメリカ的ヒューモアの代弁者である。

しかし、ロザンナが、グレイを引き合わせたいと思う人物は、ここにはいない。彼女は、ディヴィ

だけを信頼している。そこで、彼女は、ディヴィに、グレイに対して、‘some decent thing’ をする手伝いをして欲しいと頼む。ディヴィの返事は、仲々ヒューモラスで機知に富んでいるが、重要な意味をもっていることは、後でわかる。——‘How can a fellow not be who likes as much as I do at all times to make the kettle boil and the plot thicken? I’ve only got my beautiful intelligence, though, as I say, I don’t in the least want to enbroil you. Therefore if I can realley help you as the biggest babbler alive —!’ [p. 879]

ロザンナは、ディヴィの ‘good worldly face’ をじっとみつめる。彼の顔は、表面は、滑らかであるが、「終日池の上でスケートをしたように」深い皺が刻まれている。ロザンナには、彼の言葉の裏の意味は、読みとれない。彼女は、‘reality’ と ‘simcerity’ そのものである。そして、彼女には、ディヴィは、神士としての価値を浪費し尽していない人のように思える。

「それでは、どのような恐ろしいことをあなたはしたのですか?」というディヴィの質問に対して、ロザンナは、グレイに関する過去のできごとを語り、結びとして、‘I gave a turn to his life.’ [p. 884] と言う。ディヴィは、すかさず、‘He owes you clearlye everything he has become.’

[p. 884] と応じ、‘It’s too splendid to hear of amid our greedy wants, our timid ideas and our fishy passions. You ring out like Brünnhilde at the opera. How joly to have pronounced his doom!’ [pp. 885—6] と、イロニカルな讃辞を呈する。ロザンナは、彼の言葉をあくまで真面目に受け取る。——‘Yes, and you see how jolly I now find it. I settled it. I was fate.’

Davey : He does in other words whatever you prescribe.’ [p. 886]

第三場、「ブレイダーム家のティー・パーティー」  
シスイの魅惑的な姿が、印象的である。‘plain dull shy spinster’ と自認する、ロザンナのコンプレックスと対比される。

ガシーは、執拗にグレイを連れてくるようにロザンナに勧める。ロザンナは、必ず、ダイナーに

グレイを連れてくると言い放つ。シスイは、ロザンナの心を見抜いて巧みに偽装する。——‘You must keep him from us, because we’re not good enough and you are ; you must act in the sense of what you feel.’ [p. 897]

ロザンナは、シスイの言葉の魔術にひっかかって、彼女に親和感を抱く。

第一幕で、ジェームズが試みたことは、三つの場面で、ロザンナを中心として、ゴウ、ブレイダーム夫妻、シスイ・フオイを紹介し、最初の直接的な事実直面するようなやり方で、‘Scenes of the acts’ に呼び出すことであった。換言すれば、状況の最初の本質を呈示することである。

第二幕、「グレイ」8月中旬、ニューポート。

第一場 「ゴウとグレイの初対面」

グレイにとってゴウの印象は、‘the neat domestic goblin of some old Germanic’ [p. 908] で、精神の萎縮、衰退を表わしている。この老人は、ベターマンとの対照に於てしか存在の意味がない。

第二場 「ベターマンとグレイの対面」

ベターマンを初めてみたとき、グレイは、‘Ah le beau type, le beau type’ と心の中で讃嘆の叫びを発する。大きな立派な顔、品のより銀髪、秀でた額、まるで「最後の言葉」が、歴史に残るような偉大な人物にみえる。

グレイは、卒直に感動を吐露する。——

Gray : you, yourself, uncle, affect me as the biggest and most native American impression that I can possibly be expected to. [p. 917]

Betterman : I see you’ve a blank—and nobody here’s a blank, not a creature I’ve ever touched. That’s what I’ve wanted. [p. 920]

ここで、われわれは、ヘンリー・ジェームズの父親は、息子たちが、銘々自分の経験によってどのような刻印も受け入れることができるように、息子たちの精神状態を「白紙状態」に保つことを望み、そのように育ててきた事実を想起するだろう。

ベターマンとグレイの精神的な和合が、ここで生じる。

第三場 「ロザンナとグレイの再会」

ロザンナは、叔父に対するグレイの印象が、間違っていることを主張する。そして、グレイに宛てたエイベルの遺書を手渡し、‘I don’t care whether you never open it in your life.’ [p. 935] と、開封しない方がよいように暗示する。グレイは、ちよつと躊躇するが、封を切らないで、そのまま「象牙の塔」の引き出しの中にしまう。

「象牙の塔」は、‘pale rich ivory’ で、キャビネットからできている。東洋の、恐らく印度の製品で、神秘的な光を湛えており、グレイが、ベターマンの家具や貴重品の中で一番気に入っているものである。ひよつとすると、ベターマンの遺産よりもグレイの心を一層引きつけているものかも知れない。

ゴウの手紙の内容は、ひとつのミステリイであるが、ロザンナの態度は、それが、ベターマンの財産に関する「由来」であるかも知れないことを仄めかしている。「象牙の塔」と「ゴウの手紙」の組み合わせは、恐らく、グレイのロマンチズムとリアリテイの矛盾、背反をイロニカルに象徴している。

第三幕 「ホートン・ヴィント」ニューポート。

第一場 「シスイとホートンの会話」

ホートンは、グレイと自分の性格の相異を冗談まじりに話す。また、シスイは、かつて、グレイの義父、ノースオーヴァ氏と熱烈に愛し合っていたことを明らかにする。ホートンとシスイの間には、‘congruous gaiety’ があり、典型的に近代的である。

Cissy : Don’t you know how I fell so in love with Mr. Northover. . . . . that I’ve kept true to him forever, and haven’t been really in love with you in the least, and shall never be with Gray himself, however much I may want to, or you perhaps may even try to make me?

Horton : Won’t it be the best thing in the world and a great simplification for you to fall— that is for you to be— in love with him? That will be better for me, you know, than if you’re not ; for it’s the

impression evidently made on you by the late Northover that keeps disturbing my peace of mind. [p. 945]

第二場 「ホートンとシスイの会話の続き」

グレイについての愉快的品評会が開かれる。シスイの質問に対してホートンが説明する過程に、グレイのポートレートが生き生きと描かれていく。むしろ、シスイのゆたかな想像力により多く依存する。グレイの目は、‘blue-grey or grey blue’, 髪は、‘black as to his straight thick hair’ 背の高さは、‘only middling tall, in fact so very middling’ というような特徴よりも、それらの特徴を引き出す二人の明るいウイットに富んだ会話、シスイのグレイに対する異常な興味が、印象的で面白い。

第三場 「デイヴィの夕」

アメリカ社交界の饒舌で空しい絵巻が展開する。

デイヴィ、ホートン、シスイ等のまたしてもグレイをめぐる興味本位の会話がつつく。

第四場 「ホートンとグレイの再会」

グレイは、まさに ‘happy Hamlet’ であり、相手のホートンは、仇名の通り ‘Haughty’ である。ホーティは、皮肉と諧謔を織りまぜて、グレイを子供扱いにする。世間一般の例にならって、グレイの理想主義は、ホートンの現実主義に立ち向かうと旗色が悪く見える。

Gray : I want to believe in my capacity ; I want to work it up and develop it— . . . . . You’ll help me to develop. To develop my capacity I mean.

Horty : Your capacity— I see. Not so much your property itself.

Gray : Well what will my property be except my capacity? [p. 963]

第四幕 「グレイのアスペクト」

グレイは、正式に遺産を相続し、ニューヨークの実業界に乗り出す。場面は、ニューポートからニューヨークに移る。本書は、ここで終る。

第五幕, 「シスイ」, 第六幕, 「デイヴィ」 第七幕, 「ホートンとグレイの歴史」, 第八幕, 「ロザンナとグレイ」, 第九幕, 「グレイとホントンとシスイ」, 第十幕, 「ロザンナ」となることが予想さ

れる。

第三幕までは、この劇の‘fundamental antecedent’を呈示し、第八幕、「ロザンナとグレイ」が、この劇のクライマックスとなるはずである。

以上によってもわかるように、*The Ivory Tower* は、グレイの劇であるとともにロザンナの劇でもある。いや、グレイ、ロザンナ、ホートン、シスイにブレイダーム夫妻の交錯する劇である。そうして、「裏切り」の筋書が、実に微妙に進行していることがわかる。

グレイは、ホートンから受けた損失のできごとをロザンナに話すのであろうか？ ジェイムズは、「イエス」と言う。グレイとロザンナの間には、隠し立ては、何ひとつないからである。グレイは、ロザンナに‘sublime dissimulation’をもって話す。彼は、起ったできごと、彼がしたこと、これからしようとしていることを淡々と語る。彼の決心は、しかし、未だ決っていない。デイヴィには、断固として何も知らせないつもりである。それは、グレイの本能が反対するからである。そして、ジェイムズは、グレイとデイヴィの関係可能な限り喜劇的に描き、ヒューモラスな色付けを与えようとする。

ガシーが、‘as crude and hard and blatant, as vulgar’で、露骨に、グレイとシスイの仲をとりもってきたのに反し、ジェイムズは、デイヴィを、およそ道徳的な判断の外にあり、墮落した状態を超越した存在として描こうとする。

実際、デイヴィ自身は、悪意もなく、また邪悪な影は、まったくないが、彼の存在が、ニューヨークの‘financial history’の地獄の状態に鎖でつながれていることは、否定できない。デイヴィは、‘regular rag or sponge of saturation in the surrounding medium’であるからだ。

こうして、すぐには、「疑い」の結着はつかない。それは、ためらい、しり込みしながらドラマチックな幕切れを待っている。‘The beauty is in the complexity of the question’である。

グレイは、ロザンナと語り合って、一切の疑いを晴らして立ち去ることになる。そして、ジェイムズの意図は、凡ての‘precedent’をこの‘momentousness’のために備えることであつた。

恐らくグレイを裏切ったものは、ホートンとシ

スイであり、また、ブレイダーム夫妻であろう。あるいは、ロザンナも知らないで関係しているかも知れない。しかし、グレイを真に裏切ったものは、彼らではない。グレイの‘moral nerves’と‘reflective imagination’は、最後の瞬間に於て、あらゆるものを見てとる。

彼の白紙の心は、「歴史」を「社会」を「人間」を洞察するのである。‘It isn’t centrally a drama of fools or vulgarians ; it’s only circumferentially and surroundedly so. というジェイムズの言葉は、そのように結晶化されなければならないであろう。

#### 〔IV〕

1898年、ヘンリー・ジェイムズは、ロンドンの住居を去って、サセックスのライに18世紀風の家を購入してそこに引きこもり、小説の創作に没頭した。このラム館で、彼は、「夢幻の靈感にいきるとでもいうべき一つの時期、つまりベートーヴェンやターナーの偉大な晩年にもなぞらえる一つの時期を送っていた」のである。ジェイムズの中期の小説は、舞台をヨーロッパに置き、人物を大抵の場合、イギリス人に行っている。

しかし、この期に於ては、ジェイムズは、ヨーロッパに於けるアメリカ人という初期のテーマに立ち返って、彼の業績中の頂点と目される *The Ambassadors*, 1903, *The Wings of the Dove*, 1902, *The Golden Bowl*, 1904, の三つの大作を世に送った。

*The Golden Bowl* の製作にとりかかっている間も、既に61才になっていたジェイムズは、いささかも衰えない感覚と想像力によって新鮮な経験を表現したいという芸術的な意欲を燃やしていた。そのような経験の源は、アメリカである。彼は、兄のウィリアムに宛てた書翰の中で、「若い頃、ヨーロッパが、ロマンチックに思えたように今ではアメリカが、ロマンチックに見えてきた。」と書いている。

1903年、ジェイムズは、恐らく最後と思えたアメリカ訪問を試みた。彼は、ボストンからフロリダへ、またカリフォルニアへと旅行して廻ったが、もっとも強烈な印象は、ニューヨークで受けたものであつた。それは、もはや14番街が、殆ど山

の手の限界であった幼少時のテンポの緩い町ではなかったし、また20年前の訪問の思い出を楽しませる町の姿でもなかった。現実のアメリカは、彼が夢を通して描いていたものとは、余りにもかけ離れていた。産業主義の驚異的な発達に伴う社会構造の変化、途方もなく膨脹したアメリカの姿は、彼を完全に圧倒した。ジェイムズは、旅行の印象を纏めて次のように述べている。——「まったく久方ぶりを見る故郷は、興味をひくが、また恐ろしく疲労を感じさせるものとなっていた。——多くの情勢が余りにも威嚇的で、異常な世界、巨大そのものだった。しかし、結局、無惨といってよい程魅力を欠いている。」と。

ジェイムズは、この国では、人間のあらゆるアスピレーションが、金銭欲によって萎縮し、ただ物質的欲望だけが支配的であることを感じとった。この途方もない新しい人間の集合体を小説の中に描き出すためには、あるいは、ゾラの貧婪な胃袋を必要とするかのようなのである。しかし、ジェイムズは、アメリカに関する彼の知識は、東部の一部に制限されていることを愈々痛感しなければならなかった。

イギリスへ帰ってから3、4年して新しいアメリカの印象にもとずいて書かれた4つの物語は、都市生活を可成り歪めた形で扱っている。とわいえ、それらは、ジェイムズが、以前に書いたどのようなアメリカの物語ともことなる倍音を響かせている。

*The Jolly Corner*, 1908. は、それらの中でも特に注目すべき作品である。というのは、この幽霊物語は、ジェイムズの絵画的な描写技術の完成を示すという芸術上の問題はさることながら、「ヨーロッパ」と「アメリカ」に関する彼の最後の気持を表明しているとも考えられるからである。

物語の主人公、スペンサー・ブライドン (Spencer Brydon) は、23才のときニューヨークを去り、現在、56才になっているが、23年にわたるヨーロッパの亡命者的な生活のあと、唯、自分の不動産に関する状況を調べるために帰郷する。ニューヨークに戻ってきた彼は、まさにアメリカ版浦島太郎である。スペンサーは、自分が普通の寿命より長く生き過ぎたと感じる。あるいは一世紀程

もか、いや彼の不在の年月は、数字で計ることは、できないのである。

スペンサー・ブライドンが、さまよい歩くのは、ジェイムズが、ニューヨークの過去と現在の別の局面を表わそうとする手段である。スペンサーは、もし自分が、かつてアメリカを離れなかったとしたら、この国にとどまって、実業の世界に入り、「境遇によって鍛錬され、鋭敏になったこの人達のようなタイプの人間」(one of these types who have been hammered so hard and made so keen by their conditions) [*The Jolly Corner*. [World Classics] p. 308) になっていたらどうであろうかと考え初める。

彼は、その答を、彼自身の「分身」(alter ego)の恐るべき映像の中に見出す。云うまでもなく、この「分身」は、想像上の幽霊である。スペンサー自身は、俗悪な産業主義の魔手を脱して、ヨーロッパの「伝統」と「教養」の世界に憩っていたのだが、彼の「分身」は、アメリカの文明に汚されて、'evil, odious, blatant, vulgar' [Ibid. p. 332] な容貌を呈していたというのである。しかも、この男、——スペンサーは、'stranger' であると主張するが、アリス・ステイヴァトン (Alice Staverton) という女性によって、紛れもなくスペンサーその人であると証明される。——の右の手は、'had lost two fingers, which were reduced to stumps as if accidentally shot away. the face was effectually guarded and saved.' [Ibid. p. 331] となっており、彼の不具になった「精神」を象徴している。

しかし、ここで問題になるのは、スペンサーは、この'stranger'をみて、恐怖の戦慄に襲われて気を失ってしまうが、スペンサーを看病するアリス・ステイヴァトンは、'I could have liked him. And to me ; he was no horror. I had accepted him' と言い、'It may have pleased him that I pitied him.' と同情する。ジェイムズの祖国アメリカに対する良心の嘔きではなからうか。

*The Jolly Corner* を発表した翌年、ジェイムズは、友人のハウエルズに、「ぼくは、あるアメリカの小説を新しく開拓した。」と告げた。しかし、彼の仕事は、ヨーロッパに滞在中の兄、ウィリアムの病気のため中断した。そして間もなく、

肉身として親友として、他の何物にもかえがたいウィリアムを失って、ジェイムズは、過去の思い出の中に彼のイメージを保存しようとした。

1914年、ジェイムズは、*The Ivory Tower* について充分練り上げたプランを実行に移し初めたが、第一次大戦の勃発によって、惜しくも執筆を続けることはできなくなった。ジェイムズは、一友人に次のように書き送っている。——「血と暗黒の深淵に文明が突入したことは……長い間、ぼくたちが、世界は、よしやどんな減退があったとしても、徐々に改善されるであろうと考えていたことをまったく裏切ることであり、事實は、その間、謀叛的な年月が、ひそかに進行していたし、進行しようとしているということである。これは、如何なる言葉をもってしても表現し得ない悲

劇的なことである。」と。

ベターマンが、彼の甥に自分の財産を譲るにあたって彼に期待したことは、「富」と「文化」の統一では勿論ない。ジェイムズの生涯の課題は、形式と精神、ヨーロッパの文化とアメリカの理想主義を調和させることであった。しかし、危機に瀕したヨーロッパを目前にしたとき、ジェイムズにとってこの「総合」の夢は、はたしてマスイーセンの言うようにディレッタントのそれにみえたのであろうか。かりにそうであったとしても、われわれは、ジェイムズが形象化した「きわめて特殊な精神」、現実の状況を抜き出た「心の状態」の中に、血に汚れた世界に対する静かな挑戦を読みとることはできるのである。